



## コンテンポラリーダンス照明2

前回のルーシー・キーターに引き続き、この回でも、ここ20年の間にバレエやコンテンポラリーダンス界で名を上げて来た照明家、マイケル・ハルをご紹介します。

マイケルは英国コンテンポラリーダンスで注目を浴びている振付家、ラッセル・マリファンと20年以上コラボレーションしている照明家です。マイケルは、ラッセル以外にも沢山の振付家たちとコラボレーションしています。それらの公演の記事が雑誌や新聞に載ると、必ずと言っていいほど、マイケルの照明のことに触れられています。

マイケルの照明デザインした作品で印象的だったのが、2014年にロンドンコロッセウムでの演目『PUSH』でした。世界的に有名なバレエスター、シルヴィ・ギエルとラッセルとのデュエット作品として、大変注目を浴びました。2人の夢の中のような、詩的な世界観と動きを、飾りなく、追いかけて、包み込むように照らしていました。シンプルにトップとサイドだけだったような気がします。円形に一灯でセンターを照らしたトップライトから、2人はたまに、はみ出して踊るのですが、その円の光は、彼らの緑の地のごとく、微動だにしない。まるで、その地から離れることによって生まれる、ストーリー性と空間の膨らみが見えて来るようでした。ダンス照明でよく見る、サイドとバック/トップの色のコントラストはもちろん使われていたのですが、特に特殊な機材を使っていたようには見えませんでした。シンプルだったからこそ、あんなに美しく見えたのかもしれません。

彼のインタビュー記事を見ると、こんなことが書いてあります。



Eonnagata サドラーズウェルズにて

(マイケル)「私がまだ若い頃、初めて照明に関わったきっかけが、ある知り合いの振付家に照明を即興で作ってくれない？と招かれたときだった。照明のことをなんにも知らなかったから、恐怖も感じなかったよ。とことん自由にやらせてもらった。そしてすぐに、ライブパフォーマンスの儚さに魅かれていった。照明は、そんな儚い瞬間を織り成す最大の一部だ。それは無形で、触れることのできないもの。写真に撮ることも、描くことも難しい。照明は波と粒子の特質を両方もっていると思います。」

(インタビュアー)「よい照明デザイナーとはなんですか?」

(マイケル)「(冗談まじりに)画家の目と、彫刻家の手と、詩人の心かな。技術的な面は経験で養える。私は直感で生きている生き物です。トレーニングなんてしたことがなく、もっているのは経験のみ。『どこからいいアイデアが生まれてくるだろう、どのように察知できるだろう』と自分に聞いてみる必要があります。『これだ!』というアイデアは、意外とシンプルに早く出てくるものです。『これかなあ』とずっと迷っていればいくほど、傑作からは離れていくものです。ダンスの照明は、最小限に抑えつつ、その最小限を最大限に活かすことが大事だと思います。」とのこと。かっこいいですね。

私がコンテンポラリーダンス専門のラーバン劇場でトレーニングをさせてもらっていたとき、初めの頃はよく『ダンス照明と演劇照明はこんなに違うものなのか?!』と、演劇畑で表現を積み上げて来た私は、カルチャーショックみたいなものを受けていました。特にサイドライトの色選びは、『すべての空間がいくら冷たい感じでも、人間味のある色でダンサーの肌だけはキャッチするように』と、何度も注意されました。『じゃあ、演出で人間を人間ではなく見せたい場合はどうするのですか?』とも思いましたが…。肌の色味には、フォトグラファー並みに敏感にならなければいけないそうです。

そして、ダンサーを極端にわかりやすく追わ



Push ロンドンコロッセウムにて



Transmission サドラーズウェルズにて



Eonnagata サドラーズウェルズにて

ない。スペースを呼吸するように包む。フェードの時間は早くても基本30秒(作品にもよりますが)。1つの作品の中で、いくつか違ったムードやスピードがあったとしても、基本、シーンごとの繋がりを崩さず、滑らかな流れを保つ。大まかですが、これらが、私がラーバン劇場で学んだ、コンテンポラリーダンス照明の基本です。

コンテンポラリーダンス照明は抽象的で、時には斬新になれる、とても魅力的な分野だと思います。そんな意味でも、それぞれの照明家の持ち味、センス、視線、新しい試みを見比べると、とても面白く、勉強にもなります。

来年も視野を広げて、沢山の作品に出会えるよう願っております。

皆様、どうぞ良いお年をお迎えください。